令和元年度　日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立成沢小学校　教諭　石井　容子

１　派遣期日　　令和元年６月２９日（土）
２　研 修 先　　学校名　千葉大学教育学部附属小学校
　　所在地　千葉県千葉市稲毛区弥生町１番３３号
　　http://www.el.chiba-u.jp
３　研修内容
（１）視察校における研究への取り組み

| |
|---|
| 研究主題　　新しい時代を生き抜く児童の育成<br>～身につけさせたい資質・能力と授業との関係に着目して～ |

①研究主題について

千葉大学教育学部附属小学校では，平成３０年度より「新しい時代を生き抜く児童の育成」と主題を掲げ研究を進めてきた。「新しい時代」とは，AI 技術の進化や情報化が進む時代，目まぐるしく変化し，多様性に富む時代のことである。また，少子高齢化が一層進み，一人一人の判断や責任・負担が増すといった時代であり，これらのことを見据えて「新しい時代」と設定したものである。

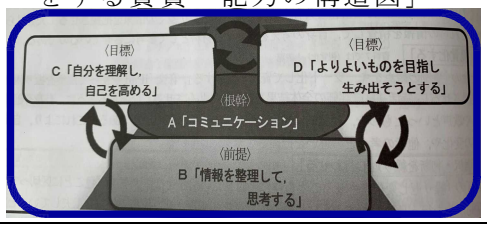
「生き抜く」とは，上記のような「新しい時代」と向き合い，その中で満ち足りた生活を送り，共に働き，持続可能な人間社会を作っていける児童のことである。起こり得る実生活上の問題に対峙しつつ，自分らしさを表出できる人間を育てるという思いから「生き抜く児童」としている。

②研究の実際

平成３０年度の研究から，身に付けさせたい資質・能力を掲げるうえで重視した点を以下のＡ～Ｄの４つに分類することができた。

Ａ　コミュニケーションの重視
Ｂ　情報を整理して，思考することを重視
Ｃ　自分を理解し，自己を高めることを重視
Ｄ　よりよいものを目指し生み出そうとすることを重視

「新しい時代を生き抜く児童の育成をする資質・能力の構造図」




Ａ「コミュニケーション」を根幹とし，Ｂ「情報を整理して，思考する」ことを前提として，Ｃ「自分を理解し，自己を高める」ことや，Ｄ「よりよいものを目指し生み出そうとする」ことを目指すことが，「新しい時代を生き抜く児童の育成」をする資質・能力の構造と言える。このような資質・能力の育成の構造を意識した授業が「新しい時代を生き抜く児童の育成」をする授業のあり方の１つと言える。また，授業の具体的な視点として，次のア～オの５つに大別した授業の工夫・手立てが「新しい時代を生き抜く児童の育成」をする上で重視すべき授業の具体的な方法の１つであると言える。

| |
|---|
| ア〔様々な情報に触れさせる」イ［視覚化する］ウ〔選択・判断を繰り返し行わせる］<br>エ［思考の道筋を示す］オ［自己への意識・思考を向けさせる］ |

③算数科の研究主題と育てたい資質・能力とその上で重視した点について

| |
|---|
| 算数科部主題「よりよい方法や解を求めようとする子どもを育てる算数科指導」<br>～反省的思考を促す手立てを取り入れた実践を通して～ |

算数科部で重視した点の具体として「AI の効率性，正確性には適わない。従来の発想にはない新たな発想で物事をつくり変える。よりよくしようと考える。主体的に反省的思考をすることが大切」ということが挙げられている。

（２）視察校における授業の実際

①６年２組　算数科　研究テーマ　「並べ方以外の場合の数を求める際も，表や図を活用することの有用性を感じさせるにはどうすればよいか」

本時では「あたり□本，はずれ２本のくじを二人で順番にひく場合，何番目にひくのがあたりやすいか，また，あたりの本数を変えていけるようにする」という課題であった。最初はどちらの方があたりやすそうか直感で判断させていた。「先に引く方が有利だ。あとに引く方が有利だ。」などそれぞれの考えを話し合う姿が見られた。「どちらも同じ」という意見もあり，児童から「樹形図や表にして整理したらどうだろう。」という意見が出て，それぞれのノートに表や図形を書き出して意見を交換し合っていた。

既習の整理の仕方を生かして「どちらもあたりやすさは同じ」と解決することができていた。教師は，予想と解にずれが生じたとき，児童は表や図を振り返り改めて整理して考え直したことを価値づけしながら，反省的思考を促していた。

①５年３組　算数科　研究テーマ　「解のずれをもとにした速さの意味を問い直させるにはどうすればよいか」

本時は，「移動区間により速さが変わる移動の場合について考える」という課題であった。「180km の道のりを３等分して，それぞれの区間を 40km/h，30km/h，20km/h で移動します。かかる時間を求めましょう。」の課題であった。これに対して児童から，「各区間の速さを平均して解く方法」が出されることを教師が想定していたが，実際には児童はそれぞれの区間の速さを素早く暗算で計算してしまい，「各区間の速さを平均する」という想定した誤解法が出てこなかった。そこで教師側から平均する案を提案して吟味したが，すでに正解が出されてしまった後なので，話し合いが積極的にされている様子は見られなかった。

しかし，正解が出された問に対しても，「なぜ速さを平均してはいけないのか」について，黒板に図を書いて説明する児童や，友達と相談する児童など多くの児童が解のずれについて考えることができていた。反省的に思考する習慣が身についている姿であった。授業後の授業者や助言者からは，「課題として出された数字が簡単すぎたので，極端な例の方がよいのではないか。」などの反省や助言があった。

４　感想

算数科の授業は５・６年生ともに一斉の形を取っており，示された課題に対して，まず，自分の考えや思いを視覚化するための時間をとっていた。既習事項を振り返り，比べながら新しい課題に向き合うことができていた。その後，それぞれの考えを表現する機会を，ペアや発表などの形で，教師がそれぞれの考えを板書して比べていく方法であった。その際，児童は自分の考えを分かりやすく伝えたり，図の説明をしたりしながら，より自分の考えを明確にしていた。また，友達の考えを聞いたり対話をしたりして自分の考えを振り返っていた。常に自分の考えや思いを見直しながら授業に取り組む姿が印象的だった。

成沢小学校の研究テーマ「対話的な学びを通して，自己の考えを問い直し，自分の考えを深める学習指導の工夫「～１時間完結型の授業の充実を通して～」と共通する考えが見られた。解が導き出されたから終わりというのではなく，より簡単な方法や工夫がないかなど，反省的思考を常にもつことが深い学びに結びつくということが分かった。

「自分の考えを深める」ためにできる工夫を算数科だけではなく，全教科を通して実践している先進校の取り組みを取り入れられるよう，研鑽を積んでいきたいと思った。

視察にあたり，派遣先校内は掲示物を含む一切の写真撮影及びビデオ撮影は禁止されていたため，板書やワークシート等を報告書に記載することはできず，外観の写真のみとなった。報告書に掲載した図は，配付資料にあった「新しい時代を生き抜く児童の育成をする資質・能力の構造図」を転載した。